



ユニバーサル絵本を読む

ボランティア活動奨励賞

点字付き絵本でみんな一緒に

ユニバーサル絵本ライブラリー UniLeaf

目の見えない子どもも目の見える家族・友だちと一緒に読めるユニバーサル絵本の製作・貸出を行うユニリーフ代表の大利栄子さんにお話を伺った。

ユニバーサル絵本とは

ユニバーサルデザインとは、初めからできるだけでなく多くの人が使えるよう配慮したデザインのことです。ユニリーフが作成するユニバーサル絵本は、その考えで作られた絵本だ。

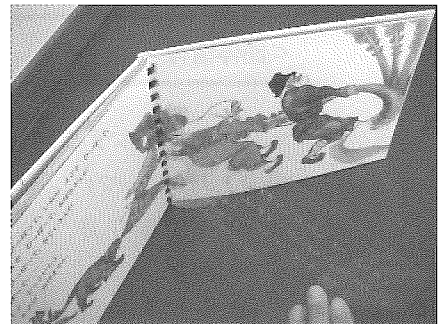
絵本の中に、点字付きの透明なシートが入っているのです。文字を目で見て読むことも、シートの上から点字をなぞって読むこともでき、目の見えない子どもでもない子ども、同じ絵本で一緒に楽しめるように作られています。

ユニリーフは、このユニバーサル絵本を一冊一冊、手づくりで作っている団体だ。

作り方は、次のとおりだ。
まず、市販の絵本を解体して、ばらばらにする。

次に透明なシートをページと同じ大きさに裁断し、そのシートに点字タイプライターを使って点字を打ちこむ。

点字には漢字がないため、語句の区切れをわかりやすくするための分かち



点字付きの透明シートが挟まれており、点字が絵を邪魔しない工夫となっている

書きのルール等細かな規定がある。それを遵守しながら、作成するのは神経を使う作業だ。特に点字を習得中の子どもたちの本なのでシート全体を作り直すことも少なくない。

出来上がったシートを絵本に挟みこんで、全体の形をもどし、穴を開け、リングを通して、再製本する。

こうした絵本を扱うのはユニリーフが日本で唯一であり、できあがった絵本は、学校や希望者に、無料で貸し出されている。

活動のきっかけ

大下さんが、この活動を始めたきっかけは、大下さんの娘さんが2歳半の時に失明したことだった。

当初は絶望したというが、「よい一日の積み重ねが、よい人生になる」とい

う言葉を支えに一日一日を精一杯生きよう、「失明したにもかかわらずではなく、失明したからこそという人生を」と願ってきた。娘さんは、明るく穏やかでのびのびとした子どもに育ち、普通小学校卒業時には学校から「彼女と一緒に過ごしたことは子どもたちにとつて財産」と言ってもらえた。大下さん自身も「これは小さな奇跡」と思っているという。

その娘さんが中学に進学し、大下さんには自由な時間ができ、「障がいがある子のために」何かをしようと考えていたときに、視覚障害児教育の専門家から、モデルとなるイギリスの取組について教わった。

「クリアビジョン (ClearVision) プロジェクト」。1986年(昭和61年)に一人の図書館司書が作った視覚障害児のための点字付き絵本から始まった活動は、いまや蔵書13,000冊以上の郵送貸出図書館に発展し、北欧や北米の国々でも親しまれているという。イギリスに問い合わせながら、作り方を学び、実践していったのがはじまりだ。

視覚障害と絵本

「絵本は、こころの栄養」とも言わ

れ、絵本にわくわくと心躍らせた経験を持つ人は多い。こういった名作絵本を知らずに過ごしてしまうのは、もったいない。

しかし、点字付きの絵本は少ない。1年間に千冊の新しい絵本が出版されている中で、市販されている点字付き絵本や触る絵本は今までに50数冊しかないという。それも、なじみがないものが多い。

大下さんは、普通の絵本を読み聞かせるなら絵のない本を選んだし、訓練や通院等に忙しく、絵本を娘さんに読む余裕もなかった。

娘さんは本が好きだったが、こんな理由から、絵本は読まずに通り過ぎてしまった。

絵本づくりを始めた当時は、娘さんに手伝ってもらった。点字の間違いをチェックしながら、絵本を楽しくしてくれた。大下さんは、「彼女は中学生だったけれど、絵本を改めてひとつと知り知ることができてよかった」という。今、ユニバーサル絵本により、目の見えない子どもと目の見える子どもが小さい頃から一緒に絵本を読むことができる環境になった。

目の見えない子どもが一人で読んでいても、目の見える周囲の人は、何を

読んでいるか知ることができる。絵本を通じて、「一緒に楽しむ」「同じ体験をする」「感動を分かち合う」とができる。

目の見えない人の存在を「身近に感じる」ことによって、障害のある人とならない人の間にあるバリアが低くなることを願っている。

高校生もつくってみた

県立逗子高校で、「ユニバーサル絵本づくり」の出張授業を行った。

高校生たちの身近に視覚障害のある人は少なく、点字を読んでいる人を見たことはない。

情報のインプットの仕方が違うだけだと知ってほしい。目の見えない人の存在を身近に感じ、普通の人だということを知ってもらいたい。ユニバーサルデザインについて考えてもらいたいとの考えからの活動だ。

5コマの授業で、1クラス1冊の絵本を作り上げる。

初めて点字を打つ高校生たちが、手分けしながら、絵本を製作する。授業時間中には終わらず、放課後の作業になってしまうことも多い。

最後の授業では、娘さんを同伴し、生徒が作った本を読んでもらった。自

分たちが作った絵本がちゃんと読めるものになっていることに、歓声があがった。

奨励賞を受賞して

奨励賞の副賞で、性能のよい製本機を買い、もつともつとよい絵本をそろえたいと考えているという。

「また、奨励賞を受賞したことで、「科学絵本」の製作に専門家の先生にアドバイスをもらえることになった。

これまでニーズがありながら、難しく手が付けられなかった「科学絵本」の製作に力を入れられる。

科学絵本にも名作が多くあり、楽しい「絵」をいかにして触って読めるようにするか、工夫が必要で、新たな挑戦となる。

現在、蔵書数は225冊。ユニバーサル絵本になるのを待っている絵本はまだまだ多い。

「絵本」をきっかけとした、ユニバーサルな世界を目指す活動に今後も期待したい。



絵本を手に説明する大下さん

<団体情報>

団体名：ユニバーサル絵本ライブラリー UniLeaf (ユニリーフ)
 活動開始時期：平成20年7月
 代表者：大下 利栄子
 会員数：14名
 TEL/FAX：046-897-6213
 HP：<http://unileaf.org/>
<http://www.facebook.com/pages/ユニリーフ/374155602671959>
 活動地域：神奈川県内を中心に全国
 活動分野：保健、医療又は福祉の増進
 活動概要：市販の絵本に透明点字シートを挟み入れた「点字付き絵本(ユニバーサルデザイン絵本)」を製作するとともに、同絵本を貸し出し、皆で長期に使ってもらえるように図書館の運営を行っている。